沖縄のページ

現場との交流で教育環境刷新

沖縄県教育委員長　比嘉梨香氏に聞く

沖縄県は、全国学力・学習状況調査で3年連続で全国最下位となった。その上、いじめや青少年の非行など、沖縄県内の教育現場を取り巻く環境は厳しい。教育委員会の具体的な活動や学力向上に向けての処方箋などについて就任2期目を迎えた比嘉梨香教育委員長に聞いた。

（聞き手＝那覇支局・豊田　剛）

ひが　りか　1959年、那覇市生まれ。株式会社カルティベイト代表取締役。琉球大学法文学部卒後、放送局アシスタントディレクターや沖縄ノムラ代表取締役を経て、有限会社「開」（現カルティベイト）を設立。活動としては那覇青年会議所国際交流室室長、沖縄県文化振興会理事などの経験を経て、2007年からに県教育委員。ＮＰＯ法人日本エコツーリズム協会理事。

――選抜高校野球選手権で興南高校が優勝した。

3試合目から決勝まで観戦したが、子供たちの底力や可能性を感じた。昔であればミスで落ち込んで切り替えができなかったが、今の子供たちはミスをバネに変えられる力がある。優勝は、同校我喜屋監督のモットーである「魂・知・和」の精神の教育の成果だと思う。

――比嘉さんが教育委員長に就任した昨年以来、「開かれた・行動する教育委員会」をモットーに活動している。

合議制の教育委員会はこれまで、実態が見えにくく、不要だという意見すら出ていた。平成19年に地方教育行政の組織および運営に関する法律（地教行法）が変わり20年に施行された。これにより、教育委員会の権限や責任が重くなった。改正法施行後に選任された最初の教育委員長が私である。

委員全員で勉強会を重ねた。書類に目を通すだけでなく、まずは現場に出掛け現場の声を聞かなくてはいけないと判断。昨年1年間、幼稚園、小中高校、特別支援学校、図書館など、学校現場や教育機関をみんなで訪問した。議案や施策に関する勉強会以外に専門家など現場の人を招いた勉強会も25回実施した。県内各市町村教育委員会や公安委員会、仲井真弘多知事との意見交換会も行った。

昨年12月には、情報公開を徹底している長野県教育委員会の定例会を視察し、意見交換をした。「開かれる」ということは

教委は行政とのパイプ役に

全国学力テスト最大限活用を

どういうことかを学んだ。

こうして、現場が抱えている課題や要望を直接聞くことの重要性を改めて実感した。その声をできる限り反映させ、総合的に教育行政に反映させていくためにも、教育委員会がパイプ役となることが必要であると感じた。

――実際に教育現場の視察を通して感じたことは。

沖縄県は、東西1000キロ、南北400キロの範囲に沖縄本島と39の有人島がある。それぞれが抱えている問題は多様だ。都市部は都市部なりに、離島は離島なりの課題がある。

例えば5級僻地の教師は通常2年が任期で、毎年半数以上が入れ替わる。また、高校がある離島は四つしかないため、ほとんどの離島では中学校を卒業すると親元を離れ生活しなければならない。教育にかかる保護者の負担は大きい。財政状況の厳しい離島自治体の負担も大変だ。教育の機会均等や公平性を保つのは不可能に近い。学力や読書力向上のための体制や環境づくり、スポーツ・文化力向上の機会づくりなど、島々個別の事情をすくい上げながら、みんなで知恵を絞り出さなければならない。

――昨年11月、うるま市で男子生徒が暴行され死亡した。

訃報を聞いてすぐに学校に赴きお焼香にうかがった。直接的には学校、うるま市教育委員会、中頭教育事務所が原因究明や具体的改善に向けて動いている。県教委としては、緊急委員会を開き、解決に向けた意見を出し合った。まずは全員が自分の問題として取り組んでいくことを確認した。今年度は、いじめ問題で真っ向から取り組んだ実績のある元校長が参事として教育行政に加わったこともあり、教育委員会と学校現場や父母・地域との連携の在り方を見いだせるのではないかと期待している。

「魂・知・和」の精神をモットーとする興南高校。2010年選抜高校野球大会で優勝を果たした

――全国学力テストでは沖縄県は8教科中6教科で2007年から3年連続で全国最下位となった。この結果をどう受け止めているか。

子供たちが自らの個性を生かし夢を叶えていくための基礎学力は、どの分野に進むにおいても大事である。勉強を楽しみ頑張れるような環境づくりが最重要課題だ。

全国学力テストのあり方は議論が必要だが、否定だけしていては何事も前に進まない。やるとなれば最大限活用すべきだ。子供たち一人ひとりの強み弱みを判断し、指導に生かすことができればいいのではないか。せっかく一斉テストを行うのなら、ただ解答用紙を送って、採点や分析結果を待っているのではもったいない。学力向上にいかに生かすかだ。

――沖縄県は昨年度から学力テスト全国トップの秋田県と教育交流を始めた。

秋田から来た2人の教諭と3回会って直接話をうかがった。赴任した小学校・中学校では児童・生徒たちを指導し、県内各地で講演をしてもらった。両教諭は基地内の学校視察も行うなど、意欲的に沖縄に入り込み、自らも学んだようだ。2人は「秋田方式」の教育方法についてのリポートも残した。秋田の教師に影響を受けた沖縄の先生も多い。

秋田とは相互に人事交流しているので、秋田に出向した教師もいる。彼らのリポートの中に「沖縄で教師は多忙だと思っていたが、秋田の先生はもっと忙しい。しかし、教師たちはいきいきと授業に取り組んでいる」とあった。

多忙には、実態としての多忙と精神的な多忙感がある。教師がやり甲斐や喜びを持って指導にあたることで、さまざまな課題を改善する。教員交流によって環境づくりと意識づくりの重要性を再認識した。生徒には学ぶことや向上することの楽しさ・面白さを、教師には教える喜び、生徒が成長することの喜びが持てるようにしたい。そのための意識向上と仕組みづくり、環境づくりに取り組みたい。